豊田市における高齢者モビリティの現状分析

豊田工業高等専門学校　学生員　○柴田栄作
豊田工業高等専門学校　正　員　荻野　弘
豊田工業高等専門学校　正　員　野田宏治
(財)豊田都市交通研究所　正　員　伊豆原浩二

1．はじめに

総務庁が発表した推計によると、1993年（平成５年）には65歳以上の高齢者が人口に占める割合は13.5%に達し、21世紀初頭には25.0%を越えることが予想されている。このような情勢下において高齢化社会による重大な問題点として、日常生活基盤となる移動問題が挙げられる。

そこで本研究では、豊田市における高齢者の交通実態を把握するとともに、現状における問題と今後の課題を整理し、移動が困難な人々のモビリティの確保のための方策を探ろうとすることを目的とする。

2．豊田市の高齢化

豊田市においても、人口の高齢化は例外ではなく表１[1]に示すように、老年人口比率（65歳以上人口／総人口）が昭和45年の4.4%から平成５年には7.3%になり、年々増加の一途をたどっている。「豊田市21世紀未来計画」の人口推計によると老年人口比率は年々上昇し、2000年に9.0%、2015年には16.8%になると予測されている。今後高齢化から生じる問題は深刻化するものと想像される。

表１　豊田市老年人口比率

区分	昭和45	昭和55	平成２	平成３	平成４	平成５
老年人口比率	4.4	4.9	6.4	6.7	7.0	7.3
老年人口	8621	13776	21235	22397	23553	24738
総人口	197193	281608	328641	332427	336928	337757

3．調査の概要

豊田市における高齢者の交通環境と外出活動の実態把握を目的とした「豊田市民の交通実態と交通サービスに関するアンケート調査[2]」が、平成６年３月に実施された。調査対象者は市内全域に在住する60歳以上の男・女を無作為抽出し、総配布数2478票に対し有効回答数は1574票で、有効回答率は63.5%となった。

調査項目は、「個人属性」「外出実態」「目的別・利用交通手段別の外出頻度」「公共交通の利用実態」「交通費」などに関する項目と、「交通サービスについての意見(自由記述)」に関する項目で構成されている。

なお分析は豊田市を歴史的つながりの強い猿投、高橋、松平、挙母、上郷、高岡の６地区に分割し行った。

4．高齢者の外出特性

（１）外出頻度変化

高齢者の外出についての結果を図１に示す。「外出が好き」の割合が最も高いのは高岡地区の52.1%で、ついで高橋地区の51.4%となっている。一方、「嫌い」については上郷地区の14.8%が最も高く、ついで松平地区の12.2%となっている。

高齢者を対象としたここ数年の外出頻度変化について図２に示す。ここで選択肢の「1.5倍程度に増えた」以

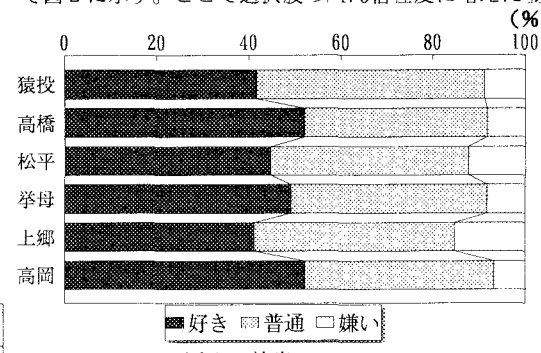

図１　外出について

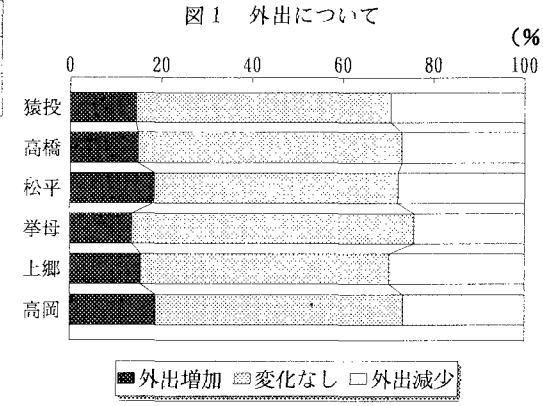

図２　外出変化状況

上に回答をしたものを「外出頻度増加」とし、「半分程度に減った」「外出しなくなった」を「外出頻度減少」として集計すると、「外出頻度減少」とする割合が最も高いのは上郷地区の25.7%である。全市で見ると、外出が減少した目的として、割合が大きい項目は「買い物」が27.5%、「社交・交際・訪問等」が19.3%、「スポーツ・教養・趣味・娯楽などの活動」が13.3%となっている。一方増加した目的については「自分の病気による通院」が32.7%で最も高く、ついで「買い物」が21.7%となっている。

なおバスによる外出について回答のない「不明」が地区により7.0%から24.0%あることは特異点として見ることができる

（2）交通手段変化

図3に外出時の交通手段の変化について示す。全地区とも「車に同乗」の割合が高い。この結果は全地区とも、公共交通機関が十分整備されていないためと思われる。なお高橋地区の同乗は低いもののバスについては全地区で一番高い値を示し、他地区に比べ路線バスが整備されていることが分かる。

5．交通施設利用に関する評価

ここでは高齢者にとって一番身近な交通機関である路線バスについて分析する。

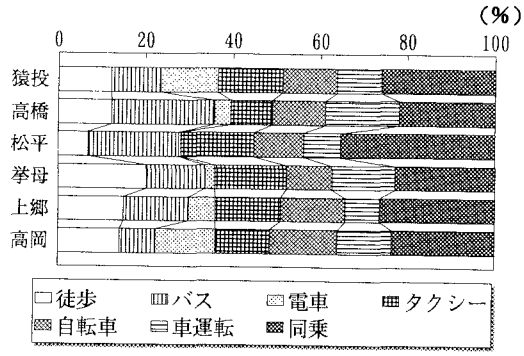

図3　交通手段変化

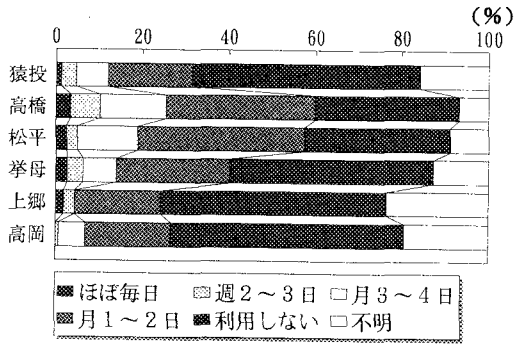

図4　バスによる外出

バスを利用して外出する頻度を図4に示す。この図から「利用しない」が50%を超えるのは高岡地区の54.0%、猿投地区の52.7%、上郷地区の52.2%である。一方、月に1～2回以上の外出をバスで行っている地区で見ると、高橋地区の41.9%が最も高く、ついで、松平地区の37.7%となっている。公共交通機関が十分整備されていない松平地区がバスによる外出が多いのは、この地区では車などの交通手段を利用できない高齢者が多いことが考えられる。つぎに、バスサービスが改善された場合に「バスを利用するようになるか」の問いでは、「3～4割増える」とする高齢者は上郷地区が51.2%で最も高く、ついで高岡地区41.9%、猿投地区38.4%となっており、これらの地区では路線バスへの期待が大きいことがうかがえる。

高齢者がバスを利用するときどのような点で困るかをバスの構造、バスの運行サービスの両方から聞いた結果、バスの構造では「ステップが高い」との回答が多かった。運行サービスでは「路線がない」「本数が少ない」「料金が高い」があげられる。

6．まとめ

豊田市の高齢者の移動についてのアンケート結果からバス路線が統廃合された地区では、バスによる外出が減ったとする高齢者が多くなっている。また、バスサービスが悪い地区ではサービスが改善されれば利用するようになるとする高齢者が多くなっている。

このことから、豊田市における高齢者のモビリティを確保するためには「高齢である」「身体に障害がある」「住む地域格差」などの理由で移動できない人のために移動にかかわる障害を除く必要がある。すなわち、利用に障害のない乗り物で、どこでも利用可能な交通サービスが受けられることである。

以上のから、高齢者対策として①移動の連続性の確保、②選択可能性の拡大の2点を軸に公共交通施設を整備する必要がある。

最後に、本研究を行うにあたり豊田市役所・豊田都市交通研究所の協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表します。

参考文献

1）豊田市：豊田市統計書　平成6年度版

2）豊田市：豊田市交通弱者対策調査報告書　平成6年3月